

# 常日頃から自然災害に備える!



セミナー会場のようす

## 日本代協阪神ブロック協議会 公開講座を開催

開催にあたり先小山ブロック長が挨拶に立ち、「今年1月17日、阪神・淡路大震災から30年が経過した。今回の公開講座が、いつ起るか分からぬ自然災害に対して常日頃から備えておくべきことを再確認していただきたい機会になればと思ふ」。

セミナー会場のようす  
日本代協阪神ブロック協議会  
公開講座を開催



先小山ブロック長

日本代協阪神ブロック協議会(先小山剛ブロック長・兵庫県代協会長)は、2月12日14時から、神戸市中央区の神戸市産業振興センターのレセプションルームで公開講座「阪神・淡路大震災から30年。震災から学ぶ。準備をして用意できること。」を開催した。第1部では特定非営利活動法人日本防災士会全国講師の横山恭子氏が「『そなえてSONAE』」を合言葉に、第2部では兵庫県危機管理部総務課副課長兼総務班長の津田徹氏が「阪神・淡路大震災からの兵庫県の歩みと防災対策について」をテーマにセミナーが行われた。

## 災害に対する備えは3つ 物、お金、心のための備えを

しながら防災に関する知識や技術を修得するため、2011年に防災士資格を取得。その後、東日本大震災、熊本地震、能登半島地震など各地でチエーンソー、重機等を取り扱うテクニカル・ボランティアとして支援活動を行っている。セミナーの冒頭、同氏は、昨今は自らの行動も再確認してほしい」と述べた。

続いて、横山氏が第1部セミナーを行った。同氏は自

然災害に対する備えは大

きく①物の備え(非常食や備蓄品、家具の固定など)、②お金に関する備え(現金、保険、制度など)、③心のための備え(自分の心を安心させる)

とともに、災害は時と場所

を選ばないと警告。聴講者に地震が発生した場合

にどういった行動をとる

たうえで、机の下に潜り込む二邊倒な避難行動は

古い考え方で、地震時には「頭と首を守る行動をとるために思考を働かせる」よう、想像力と対応力をもって行動することだと強調した。そして、信号が赤の時は停止することが当たり前のよう

に、防災に関する日常信号が赤の時は停止することだと述べた。また、災害時に災害に対する備えは大

きく①物の備え(非常食や備蓄品、家具の固定など)、②お金に関する備え(現金、保険、制度など)、③心のための備え(自分の心を安心させる)

とともに、災害は時と場所を選ばないと警告。聴講者に地震が発生した場合にどういった行動をとるたうえで、机の下に潜り込む二邊倒な避難行動は



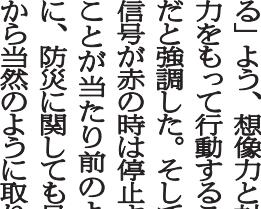
(損保版)

第1~4月曜日発行  
発行所 新日本保険新聞社  
大阪市西区朝本町1丁目5-15  
(郵便番号550-0004)  
電話 (06) 6225-0550 (代表)  
FAX (06) 6225-0551 (専用)  
購読料 1か月2420円  
(消費税、送料込み)  
©新日本保険新聞社 2025

78th Anniversary  
since 1947  
創業昭和22年  
保険・共済業界と共に歩んで78年

# 阪神・淡路大震災から30年。震災から学ぶ。

横山氏



横山氏

う。①の物の備えでは、食より先に排泄が問題になるし、不特定多数で使うトイレより家族で使

う。②トイレを準備し、トイレペーパーやティッシュ、ごみ袋、トイレ用

ライトをセットで用意すれば、また外出の際には誰とどこに行くかなを共有し族間で連絡先、集合場所を設定するとともに、家

庭園で相互の連携、⑤災害に強いまちづくりを挙げ、それぞれに兵庫県と

して取り組んでいる対策を紹介した。また、近い将来に予想されている南海トラフ地震の県内被災地は震度7、最高津波水位は8・1mとなり、兵庫

県全体では死者数が約2・9万人に上るとした

一被災した場合に受けら

れる災害弔慰金、災害障

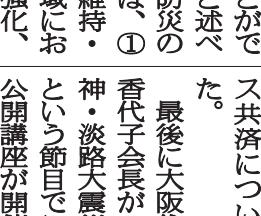
害見舞金などの制度を知

までの減少させることができるので、地域防災の向上を図るために、①防災意識の向上・維持・普及、②個人、地域における自助・共助の強化、③事業者としてのレジリエンスの強化、④事業者としての共助が重要なポイントになると話した。

第3部では、兵庫県危機管理部防災支援課副課長の西岡武則氏が同県独自の自然災害に対する共済制度であるフェニック

ス共済について解説した。最後に大阪代協の新谷香代子会長が「本日、阪神・淡路大震災から30年という節目でこのような公開講座が開催されたことを何かの巡り合わせだ」と感じる。わが国は地震大国であり、今年も震度5以上が5回発生した。横山先生がお話をされたように、私たち業界はお金の備えで力になれる。この30年の節目に今一度心にとめて被災された方の重建に力強く、少しでも力になれるよう努めた。これからも皆さんと力を合わせ防災、減災に向かってまいりましょう」と挨拶し、閉会となつた。

津田氏



津田氏

よう」と締めくくった。

第2部では、津田氏が、

阪神・淡路大震災から得た教訓として、①災害に対する備え、②初動対応、③地域防災力、④防災関

対策などを避難対策を徹底すれば死者数を400名

ではなく、現金はもちろん環境の変化とともに見直すこと、そして万

が、避難体制の確保、避難訓練、避難行動支援者

すれば死者数を400名

に結成された加古川市の消防団女性分団の初代代表に就任し、防災活動を

るがあった。2006年に阪神・淡路大震災に参加した際に防災活動について思うところを述べた。

阪神・淡路大震災から30年。震災から学ぶ。

新谷会長

新谷会長

新谷会長